里山の管理と多様性

動物応用科学科 4 年　伊澤　整

最近、家の近くのアスファルトにカナブンやセミの死骸をよく目にする。彼らはいわば生を「全う」したものたちである。その姿を見て、死への悲しみとともに外敵に食されたり、大きな事故に遭ったりせず「よく生きた！」とこちらも満たされた気持ちなる。

このようなことをふと思う理由として、調査地の草刈りを見たことがある。

週に 1 回のペースで小野路の神明谷戸に通っている。先日、調査に行った折に避暑のため小休憩をとったのだが、緑が比較的多い自分の家周辺と比べてさまざまな生き物の息吹を感じた。アカガエル、アマガエル、色や大きさが多様なチョウ、見たこともない毛虫、夕日に映えるトンボ、サワガニ、手のひら以上もあるクモ、エンマコオロギなど田園風景の代表格はほぼ揃っているのではないかと感動した。いつもはカメラのフィルムを取り替えることに夢中で気づかないのだが、草むらに腰を掛けて初めて命の息吹を感じた一時であった。横になってふと周りを見回すと、小さなたくさんの命に出会うことができる。このことに気づき、小さな命を奪わないように以前にも増して草むらを歩こうと気を使うようになった。その分こける頻度も増えたが…。

そう感じた矢先、次の調査にやってくると腰丈まであった草はきれいに刈り取られていた。歩きやすく、カエルやコオロギ、バッタなどすぐ目に付く小動物を発見しやすくむやみに彼らを踏んづけないなどメリットは多くなった。と感じたが、先日のことを思い出した。丁寧に見ることで気づくことのできる小さな虫たちはどうなったのだろう？自分の研究の意義として挙げている、人間の管理による生物多様性の増加とは一定の動物にとってのメリットであり、犠牲になる生物も存在するのではないか。そんな素朴な疑問が頭をよぎった。とくに自分の研究対象である中型哺乳類にとっては異なった植生管理が生物多様性を高めることに貢献しているという結論を出したいが、この多様性とは他の犠牲を負って成り立つものではないかと疑念が残る。

政治の面でも、誰かに対してメリットになることはその他の人にとってのデメリットになることが度々ある。より良い効率的な方法を模索することにおいて全てのものがハッピーになることは非常に難しく現実的でないことは承知である。しかし、上述したように虫 1 匹でも命はあり、より良い環境を選択する権利はあるはずである。その権利を少しでも尊重できる環境が提供されることを切に望むとともに、自分の研究もその助力になれたら光栄である。